

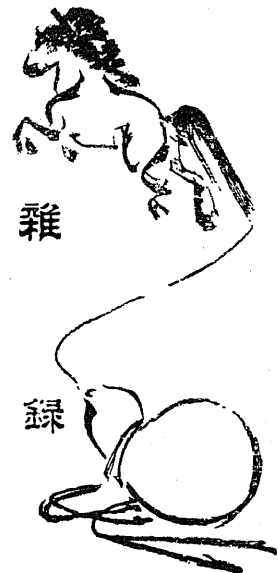
つて話をするとか、物の眞似事をする事もあらう、  
 角種々の種類は十歳と十五歳の間に自然に自  
 ら工夫して拵へる、さう云ふ譯であるから年を取  
 つたものが即ち吾々が能く勘考をして、子供の性  
 質に合はぬ遊びを拵へてやつても、それを子供は  
 面白がらぬ事であらうと思ふ、先づ是等は各幼稚  
 園なり、各小學校の遊びを集めて統計表を作れば、  
 何歳の間に如何なる種類が多いと云ふ事が判る、  
 と云ふやうな事實がある。(つゞく)

むさし野は月の入るべき

山もなし

草より出で、

草にこそ入れ



雜

録

江馬細香女史の詩(承前)

小林雨峯

予は次に、女史の詩數首をかゝげて、少しく女史  
 の詩品に對して、彼の當時詩界の驍將、星巖の夫  
 人、紅蘭女史のと比論せんと欲す、

不聞鐘響到閨扉。曉夢沈々臥翠幃。

半點燈搖斷腸雨。故將春睡送春歸。(春晝)

船燈半點夜濛濛。一枕愁眠波響中。

夢到濃山三百疊。冷風淒雨泊孤蓬。(遡濃河)

輕舟棹下墨陀川。

萬頃涼波月湧天。

驚宿鷗眠夜初定。

一巾清影屬詩仙。（墨江月夜）

格調の清らかなるうちにも、雨中の凄怨を寫し、

旅夢の情なきを歌ふにあらざるや、

與梅相侶送殘年。

一片清香撩醉眠。

但塊髮邊多白處。

三更酒酌獨凄然。（歲晚）

衆艷一時難併開。

葵花忽被妒風催。

紅闌多少春宵夢。

我愛空蟬蟬脫來。（讀源語五首中空蟬）

春意如泉沸不留。

擬撓青帝領溫柔。

一連技上寒暄異。

落葉蘭々獨占秋。（全著案）

羅幃凌波月淡明。

依稀玉色欲傾城。

香魂恰似梅花冷。

本與渠濃是弟兄。（水仙）

橫斜香影奈朦朧。

正是吟窓靜夜中。

一盞寒落花有恨。

故將眞色欲爲空。（燈下梅影）

月明今歲泣中秋。

憶昨啣杯倚樓。

翠酒承歡多少事。

總爲悲淚徹霄流。（秋日作）

澗水潺湲霜葉紅。

高低路入亂山中。

斜陽一片行人少。

木末踈踈是我儻。（路上雜詩）

寒閨寂寞掩窓紗。

秋老瀼々風露斜。

菊意與農同一櫬。

日高離畔臥開花。（秋晚）

歲晚に於ける感懷尋常一様の作に似たりと雖も、凄然たる趣さは他の詩と一貫して悲哀の趣さ

を浮べ居るに似たりとせずや、秋日、秋宵、歡樂の慰

むべきなく、寒閨人空して風露瀼々の裡、多少厭

世の意を洩せるもの、讀むもの自から一種の感に

撲たるもの概あり、然れともまた

磨鍼曾是幾登臨。

舟影湖光入短吟。

今日舟遊奇絕甚。

却從湖上望磨針。

山峰不見一尖青。

眼裏唯看沃土平。

（叔父父子及通齊、自彦根泛真湖送余、至木原師）

萬樹風松翠濤動。

金麟出沒五層城。

(據名古屋途中)

前首奇巧を弄したることあり、句必らずしも佳絶ならずと雖も第二首の繪畫の如きと比して、躍如として、名古屋城を目堵するが如きにあらざるや、而して女史は生平花卉を愛し、墨竹を畫くの性、往々題畫の詩、咏物の作中に見るべきものあり、

花比去年多幾技。

慇懃愛護下簾帷。

縱能清操埋寒夜。

不遣風霜迫玉肌。

(聞嘉益模盛開偶有此作)

何等の濃情ぞ、

誰種脩篁傍水灣。

猗猗挺挺凌霜寒。

一饒容易窺全節。

半抹朝煙掩碧竿。

(題自畫墨竹)

獨立湘江霜雪中。

終年裊々帶清風。

搖來數丈青天箒。

掃去人間塵土空。

(墨竹)

舊時情怨憶陳王。

微月凌波影渺茫。

窓底至今散龍廚。

鳥金打字十三行。(墨水仙)

寒鞋踏凍幾躋攀。

奔走風塵衣食間。

不似前頭白雲狀。

無心竟日繞峰閑。(寒山行旅圖)

感慨の狀遺問の意、自からまた寓意の深きものあるを見る、巾幗者流の口吻にあらざるを知らしむるものあり、若し夫れ清警にして高尚なるもの明麗にして雅淡なるものを求めば、

山々收雨夕陽多。

江水平鋪浸翠螺。

三兩漁村垂柳外。

牙頭舫子點春波。(題畫)

天地蜉蝣詎斷腸。

清風明月鎮蒼々。

千年寫取又何謁。

即是丹青無畫藏。

高遠にして幽致あるもの地下の坡翁をして見せしめば必ずや忤舞せん、五言題畫の句

一路離人境。

傍流三兩家。

滿地墜桃花。

雲起山無脚。

泉澗樹露根。

漁郎能到否。

茅檐多架水。不必設籬樊。

七言、五言、之を律詩中に求めんか。

破烈經霜幾幅箋。

秋來又懶寫新詩。

一叢憔悴幽堦外。

半歲榮枯奇石前。

難障夕陽涼傘影。

何妨夜雨旅窓眠。

莫言風雪無清操。

曾入王維畫裏傳。

(敗蕉)

秋宵如水夢頻驚。

林樹鴉啼三兩聲。

更漏稍稀添被冷。

殘燈漸暗覺窓明。

一聯偶向閑中得。

萬感渾從枕上生。

展轉不眠思舊友。

悟看落月屋梁清。

月夕不寐

樓前垂柳已藏鴉。

樓後海棠春半過。

燕窻新泥畫簾雨。

雁行小柱素筆歌。

人含悲處言尤少。

花欲殘時香倍多。

未免紅顏恨凋謝。

寫將心事付吟哦。

(惜春)

座枕江流不設門。

五家三戶自成村。

漁歸磯畔餘醒氣。

潮退沙頭疊浪痕。

暮靄衝飛雙鷺白。

夕陽斜照半林昏。

魚蝦換酒知多少。

隔柳時聞醉語喧。(暮過漁村)

敗蕉、後聯の二句自から凄愴の氣を含むの間、また大に感慨を叙せる、月夕客枕驚き易さのところ

に、展轉して萬感抑へかたさのある、惜春の情、胸中に湧湧し來りては人含愁處言尤少と喝破せ

る何ぞ夫れ凄絶、哀絶なる、バイロンの如き狂熱

はかゝる漢詩人には到底求むべきことにはあらね

ど、心中悶々として洩らすに地なく、止むなくし

て漢詩の上に描寫し來る、其情實に察すべきもの

あり、

五言の詩中に求むれば、

久別尊中酒。相逢鬢上霜。人皆過半百。

節已近重陽。滿酌杯浮綠。全開菊吐黃。

周旋同醉地。

自異昔年場。

佳會難常得。

閑遊亦覺忙。

參僧雙履雨。

看菊一筇霜。

昨醉連今醉。

他鄉即故鄉。

預愁行樂地。

明日夢茫茫。

（京城秋遊呈諸舊交）

苦樂人間老。

炎涼歲月流。

一家同骨肉。

六○裏○乏○春○秋○。

思夢逢亡友。

衰年感昔遊。

梅花舊顏面。

相見冷香幽。

（歲晚）

見詩如見面。

聞信似聞音。

早晚消離恨。

相逢話此心。

花邊滿樽酒。

月下一張琴。

總入清宵雨。

可知交態深。

（奉寄鐵心大夫。兼贈研山中山兩君）

詩人的本領はかくの如くにして始めて現し來るなり、泣くと雖も、何物をか捕え來りて情を遣るなり、笑ふと雖も「自然」に對して竊かに悲を托するなり、若し夫れ古體詩に至りては、

櫻開方人落。

櫻開期歸家。

吟筇三十日。

無日不着花。

東山千堆雪。

西郊萬朵霞。

遊春雖之樂。

奈此鬢上華。

故交半鬼錄。

知己多天涯。

每經昔遊地。

轉覺悽愴加。

一醉花底酒。

強就旗亭賒。

（己酉遊京作）

春風徐ろに吹くの處、櫻花の爛熳たるに對しては如何なる沒風流漢と雖も、歡喜せざるはなさ、これ人情の常なりと雖も、女史既に齡を重ねて、故交多くは鬼籍に上り、我身はまた定まる處とは更らになく、昔遊の地に遊びてかくの如きの情思また襟袖を濕はすものはまた止むを得ざるものあり、然れども詩人は決して泣き暮し、哀れに過ぐすのみ其の能にはあらず、若し豪爽を極め天空海瀾の文字を叙す、左の詩の如きは女流作家中多く之を見ざるの類たり、

二月念六日。

布帆發桑城。

海面湧旭日。

天色入朝晴。

豈料雲行亂。

須臾鬪電鯨。

駭浪高於屋。

船從波底行。

未知向何處。

洶々千雷鳴。

舵工面如土。

一舟暈如醒。

僅得認遠嶼。

衆意漸似平。

若能審無假。

自齊死與生。

可憐同舟客。

各自稱佛名。

(二月念六、舟過七里濱  
遇大風浪僅得上巖村)

全詩實景より着筆し來る、曲折轉接力を費さず

して、而かも人をして躍如其の狀を想はしむ、捷

手辣腕にあらざれば能はざるところなり、其の形

容の見るべき、其の厄境に於ける覺悟、悠々とし

て迫らざるが如きものあり、聞秀詩人、多くは頓

弱に流れ易く、然らざれば得意満面、之をしもか

の星巖翁が、夫妻相携へて、四方に遊び常に琴瑟

の狀ありしやを思はしむるものに比すれば、自か

ら詩人として、女流作者として二者の差異を顛別

するに難からざるものあるを見るべし、

紅蘭女史の詩を抄して聊か左券となすべし、紅

蘭は齡十七歳にして星巖に嫁し、星巖に仕ふると

極めて懇篤、星巖の南船北馬其の寧處なきの日に

あたりては、紅蘭また之に従ふ、西征して九州の

地に向ふや、隨つて作するところの詩、卅一首あ

り、京師に歸りて、芙蓉鏡閣集あり、江戸に入り

三十五首あり、風調或は星巖に摸せるものあり、

總じて何れも愉々快々の趣きを備ふ、西征の際、

除夕の感懷に

思歸三歲未能歸。

紅燭依微照曉幃。

憶得東風舊粧閑。

姉呼妹喚整春衣。

其他、

太平風俗競豪奢。

不問桑麻只問花。

我圃亦栽桃杏在。

暫拋針線弄春霞。(春興)

閨窓人靜夜風清。春到海棠殊有情。

一笑貧居出無燭。倩他明月照庭行。(春夕)

細香の春風、春夕に對して哀思動くに比して之れは熙々として温かなるものあるなり、家庭の趣味に尠からず喜びを浮べつゝあるなり、故に詩中に巧麗なるものを求め、纖細なるものを求むれば蓋し尠しとなさざるなり、

澹雲籠屋暗。微雨逗簾涼。谿近聞寒水。

林疎見夕陽。殘楓留酒氣。晚菊帶詩香。

幽賞曷云已。低徊吟澹忘。

情思の羨むべきが如きものは、

四隣人已定。燈火夜蘭殘。雪逆月光白。

雲隨風勢圍。家貧爲客久。歲晏怯衣單。

鼓半起烹粥。思君吟坐寒。

客中にありても悲みの狀なく、思郷の情を寫すも、

其れ程にはあらざるなり、思郷の句中或はたい古人の換骨をなして悲哀をわざとらしく咏ぜしが如

きは随分いかはしきものなきにあらず、然れど

も流石は星巖の妻たる程なり、中には格調と云ひ、

風尙と云ひ自から稜々たるものなきにあらず、

誰剪梧桐失鳳棲。丹山萬里夢魂連。

多才敢望蔡雍女。知道愧非王霸妻。

黃壤無由終養育。青冥何路共昇躋。

鹿車後約分明在。茅舍柴門白水西。(客中述懷)

流光與客共匆匆。秋老羈懷慘澹中。

灑笠寒聲黃葉雨。薰衣午氣紫芒風。

詩書只合畢生業。鍼菴動拋經日工。

舉案之賢妾何比。遐征幸侍五噫鴻。(旅懷)

舉げ來れば限りなし、たい夫れ紅蘭は秋風の蕭條

たるなく、春風の和煦なるが如し、細香に至りて

は幽谷に泣き萎むの白百合の如きか、あゝ細香女史の生涯、嗚呼何ぞ悲しき歴史を以て満たさる此くの如きぞや、女流にして女流らしからず、其の一生を終らば細香の如きの最後をなさんは必せり然れども『湘夢遺稿』は遂にわれをして、人生の慘事を繰りかへさしむ、あゝ

附記、われ東西に旅寢して此稿を全ふするとを怠り讀者にそむく事多し、随つて無難に筆を下す、讀者願くは其の心して讀みたゞはらんとを、

附記、左に中島樸隱、大槻盤溪諸氏が細香女史に贈りし詩を得たれば掲ぐ、いかに女史が當時文士の間に重ぜられしかを知らるに足る、

贈細香女史

中島樸隱

滿窓竹影夜蘭騷。

知汝茲時弄瘦毫。

月姉相看合相慰。

人間無復郭崇韜。

全

大槻盤溪

別來客易換炎涼。

幽竹猶憐水墨香。

一穗寒燈亂書底。

滿窓夜雨夢瀾湘。

兵隊でッて

和歌子

●模倣と想像の盛なる時代になる幼兒の集まれる幼稚園の此一室(在東京市)、時には全室、海となりて、腰掛にて作られ又は木片にて積立てられたる軍艦の幾艘浮ぶ事あり。時には隅田川となりて河蒸氣船の往來するあり。彼處に桃太郎の躍れるあり。此處には自稱渡邊綱の竹馬に乗りて威風(?)四邊を拂へるあり。此隅はオバサンゴツコにつかはれて一家庭となり、彼窓際は螢となれる二



三兒を腰掛にて圍ひて大なる罎籠と名づけられ、之を養ふ一二兒の水を與ふるあり。全幼兒雀とも鳥とも雁ともなりて室内を飛びまはり、室は化して鳥の飛ぶ庭とも野とも山ともなる事あり。誠に千態萬狀、社會のいろ／＼の事物は小さい人達の上に反影となりて現はれます。幼兒でございますから幼兒の社會の事は無論行はれます。其上に大人の社會でする事が幼兒化して摸倣せられるのでございます。

●十人許の男兒が手に手に竹切を持ち鐵砲に擬して居る。一兒「集レッ」と叫び、衆兒列を作る。「オイチニ」のかけ聲と共に、一同足並そろへて歩み出す。前に「集れ」の號令を發したる大將（彼等の所謂）は、衆兵士と別に離れて前の方に歩み、時々全隊を見巡りて足並の揃はぬものに注意を與

へる。兵士は「オイチニ」をやめて、皆異口同音に「ダツピン、ダツピン」と言ふ。之は「左右」なので、体操の時の號令をかやうに聴き取つて居るのである。やがて唱歌好で音樂の耳ある一兒先登となり「テタテタター、テタタター」と口拍子をとる。しばらくする内には幼兒ながらに步調が整て来る。傍觀して居る女兒が「アンナニヨクンロヒマスヨ」などと言ふので、皆喜んでなほよく注意して足並を揃へる。今度は「駈ケ足ッ」の號令が出る。一同駈け出す。忽ち二方に別れ、敵味方となりて打合をする。次にかの大將「ミンナ馬ニノルケイコナサイ」と言ふ。兵士の内には化して馬となるあり、やはり兵士で居るもあり。こゝに何騎かの騎兵ができて駈けまはる。蹠く者、人が馬を後に置き去りにして駈け出すものなどさま

さまで、之は皆凡て落馬の体となるので「みんなヨク落ちルデセウ」と言つては私を見て笑つて居る。次はマジメに騎兵の列を作り「ハイ〜」と言ひながら、落馬せぬやうに氣をつけて駈ける。之が見る間に砲兵にも歩兵にも化して、大砲や鉄砲を打つ。鉄砲は例の竹切をかまへて、ねらひを定め「ドーン」と口で言ふので、大砲はさすがに此細い棒では物足らぬと見えて、二兒づゝ兩手を組み合せ、一方の手を前に突き出して「オホッ、デッボードーンドン」と言ひながら歩きますので。すこしたつと又例の大將、「雪中行軍ヲシヨ」と發起する。一同其處に倒れ伏す。是れ雪中に埋れたる体で、二三兒は搜索隊となりて、棒で雪を掘るやねをし、徐ろに兵を起して藥をのますなどの事がある。間もなく皆立ち上る。今度は二兒番兵

となり、相對して姿勢正しく直立する。其後から「サー天子様 皇后様ノオトホリデスヨ」とささふれしながら、一列の幼兒肅々としていかにもマジメな顔をして無言で通る。と見て居るとまう何時の間にか、二三兒は向の方の方に駈け出して腰掛の上に正座し、衆兒が下から手を合せて拜んで居る。上に正座した兒等は無言でマジメにすまして居る。「ソレハ何デスカ」と問ふと「招魂社に祭ッタデス」と答へる。之をきいた私思はずふき出した處が、參拜人も祭られた人も皆わけもなく笑ひ出しました。

右は或日實際幼兒の間に行はれました兵隊ごつての大略でございます。

## 幼稚園の遊嬉

## 十八、汽車

甲乙二組各二行となりて相向ひ、先づ乙組二人つゝ互に手を連ねて隧道を作る、一同汽車の歌を唱ひ「動き出す」に至りたる時、甲組汽車となり二行の幼児交互に入り一行となりて、隧道をくぐり始む、先頭の幼児隧道を出づれば元の位置と反對の方向に進み、再び二行に復して元の位置に歸り、更に隧道となり乙組は氣車となりて前法の如くす。

## 十九、探し物

先づ隠し置くべき品物を一同に示し置き、後之を探し出だすべき幼児（一人或は二人）を出して眼を覆はして、一同の中に物品を隠し置き、而て樂器の音に據りて探し出さしむ。樂器の音は搜索者が隠したる物品に近づく時は漸次強大となり、遠ざ

かる時は微弱となりて以て其場所を暗示するなり。

## 二十、花賣

「花賣り」の唱歌に伴ふ遊嬉なり。先づ衆兒にて圖を作り、一人の幼兒眼を隠し五種の花赤き牡丹、白菊、黄なる山吹、紫の董菜、青き桔梗、但し五種にて多きに過ぐる時は三種にしても宜し）を持ち花賣となりて圓の中に立つ、次に此花賣りが賣らんとて取り出す花を見て、周圍の幼兒は其花に相當したる賣手の唱歌を唱ひつゝ、右或は左に廻れば、花賣は其聲をしるべに其花を或る一人の幼兒に賣り渡し、よく其花と買手とを記憶し置く、買手は又手早く其花を後ろに隠し置く、かくて其花を悉く賣り盡したる時、眼の覆を取り去り周圍の幼兒が買手の唱歌を唱ふに應じて、前に買ひ取

りし人を求む。若し其人を誤まる時は、誤まりて名指されたる人代はりて花賣となり、既に前の花賣の集めたる花あらば之を受け取りて残りの花を求む、此花賣亦途中にて誤まる時は、其時名指されたる幼児又代はりて花を受け取り残り花を集む、若し賣手が一も誤まることなければ最後に名指されたる幼児出で、次の花賣となる。

## 二十一、時計

二人の幼児圓の中央に立ち、互に右手を取り左手を伸ばして時計の針に擬し、時計の歌を唱ひつゝ廻り、一回の歌の終はると同時に止まり樂器に依りて報ずる時計の音を二人に答へしめ、其答の當りたる時は針にて指されたる幼児二人代はりて針となる。

## 二十二、花輪

六十

衆兒圓形を造り（一人或は數人の幼児其中に入りて心となるも宜し）豫め五等分（花輪の數によりて異にす）して其分點に當る幼児五人を定め置くものとす、さて進行の曲に由りて圓は右若くは左に回轉し始め唱歌を唱ひ出すと共に前に定め置きたる五人の幼児は中心に向つて同時に進み行く時は、其形は即ち五瓣の花形となるべし、再び進行の曲に伴ひて元形に復して回轉し、又唱歌を唱ひつゝ花輪の形をなすものとす。

## 二十三、又行進

衆兒二行となり、二人づゝ手を取りマーチに合せて進み行き、手を連ねある儘、交番に左右兩組に別れて圓形に進み、反對の位置に於て出遭ひたる時は左組は二人づゝ手を取りたるまゝ右組二行の間を分て進む、次に出遭ひたる時は右組左組の

間を進み、次に出遭ひたる時は兩組とも手を離し互に一行を夾みて進み、次に出遭ひたる時は前に内行せしもの外行し相夾みて進み、次に出遭ひたる時は手を取りたる二人左右より交番に入り、最初の如く二行となる、既に二行に復すれば互に手を放つて左右に別れ進み、其先頭出遭ひたるものと、左右より交番に入りて一行となり、更に手を連ねて一列となり、次第に圓を作り續いて渦まきとなる。

#### 二十四、四列行進

四列に並び進行の曲によりて種々の方向に行進す。

#### 二十五、鎖

圓形を造り奇偶二人づゝ向ひ合ひて組合をつくり置き、樂曲に合して奇數の幼兒は左に、偶數の幼

兒は右に進むものにして、最初は互に右手を取り各自の方向に進みながら右手を放して左手にて出合ひたる兒の左手を取り、次に其手を離すと同時に又右手にて更に出遭ふものゝ右手を取り、かくして遂に我が組合に會ふこと二度目にして己む、此時樂曲を變じ最初の八拍子間圓を作り、圓心に向ひて四歩進退すること二回、次の八拍子間に再び各組合を作りて前法を繰返す。

#### 忘れな草の由來

日本名で瑠璃草といふ可愛い草花がある、春から夏にかけてうす紫の小さな花が咲いて花の形とい葉の格好といひ、まことに優しく出来て居る。此花は英語で Forget-me-not (な忘れそ) と呼ばれて居る、獨乙語でも同じ意味で Vergiss mein

nicht と呼ばれて居るが其名の由來については  
ろく説があるけれども、南方獨乙邊では、次の  
様に傳へて居ること。

或時一人の武士が、愛する情人と涼しい河邊を散  
歩して居つた所が、折しも其河岸にはいろ／＼な  
美しい花が咲き亂れて居たので、婦人は男に向つ  
て、あの花を取つて、この花をなど求められる儘  
に男は一々摘み取つて與へた。所が、最後に、婦  
人は遙か水のあなたに可愛く咲き揃つて居た瑠璃  
草に眼を留めて、「な序でにあの花も」と望んだの  
で、男は、やがて、そを取りに急いだが、あはれ  
忽ちにして底知れぬ淵の中に足踏み滑らして陥つ  
た。將に沈まうとした、其刹那に彼は、漸くにし  
て摘み取りたりし、瑠璃草を一つかみ、岸邊の婦  
人を目掛けて投げ與へつゝ、

ゆめな忘れそ！ Vergiss mein nicht！ と叫び  
ながら、とう／＼死んで仕舞つた。

之からして、あの可愛い小さな花は このあはれ  
な名を負うたとの事である。そう思つて此花を眺  
めると。氣の故でもあらうかしみ／＼と形見の哀  
を殘して居るかの様だ、まして夏の夕暮、露の華  
の宿れる姿など

忘るなの言の葉くさは枯れぬれど

思ひいでおはき花のすがたよ

(牧羊)

樹蔭の獨語

夏山みどり

避暑

常に、青々とした山の邊りや、清らかな水の邊り

に御住ひになつて居られる方は、夏が来たからといつて、別段周章で、逃げ廻はるにも及びますまいが、兎角都會住ひの身は、頓とそうは行かぬ様で、そら夏だといへば直ぐ大磯とか、逗子とかへ逃げて廻はる、そら冬が来たといへば、忽ち、熱海、修善寺あたりへ避けて廻はるといふ風で、それを思ふと、結句地方の住ひが、どれ程安樂か知れませぬ。

この程も、家庭雜誌といふに、名家の家族的避暑の考案が載せられて居ました。先づ柳澤伯の航海旅行、面白いことは面白いし、有益も有益ですがとても、吾々下つ方の者には眞似は出来ません。其他は大抵大同小異で、一家族、父母も息子も息女も祖母さんも、お祖父さんも一家舉つてどこか、田舎の海邊へ一軒の家を借りて、そこで自炊

して此夏を過せば、費用も至極簡單で、且つ最も有益だといふお話し、之は何人も賛成だと存じます。一番よくつて、一番行はれ易い様な御話しですが、とかく私どもの知人の範圍内で、此様な方法を取る人の少ないのは、やはりそこに何か事情があるからでせう。

讀賣新聞に避暑の榮と題して、醫學の大家の意見を出されて居ますが、之は、避暑などに御出での方の宜い參考でせう。海よりも山の方は避暑地として宜しいといふお説も見えましたが、私共は、別におさしみを頂きたいからと申す譯でもありませんが、どうにも海の方が氣が清々します。遊ぶにしても、運動するにしても、いろ／＼變化がわりますから。

同じ新聞にも出で、居りましたが、夏休中、學校

の兒童を一團にして、山とか海とかに旅行をやつて下さると教育上至極宜い結果を見ませう。長い休み、然かも、どうかすると怠眠を貪り易くなる夏の休みの間、どれ程家庭で氣を附けても、頓と學校でやつて頂く様に規律的に行きませんで、とかく不衛生に陥り、おまけに折角學校生活に馴れた規律が壊されます。だから、僅かの費用で、夜は樹蔭冷しい所で、テントの下に眠るといふ風でズーツと續けて旅行でもさして頂くとどれ程有益だかも知れません。

病氣

井口あぐりさんのお話ですが、彼國の學校で生理の教授を受けて居られた時分、教師から、傳染病の名を知つてゐるかと言かれたので、コレラと回答へになつた相で、所が、同じ組の生徒中、誰もコ

レラといふ病氣を知つた者がなかつたので、井口さんは太變に赤面せられたと申す事でした。又久しく英國に留學せられた、川村さんのお話に「一體日本人ほど病氣に精しい國民はない様です、私の居つた學校などでは、病氣といへば、頭痛、風邪、齒痛、痛腹位より外は、誰も病氣の名は餘り申しません。日本人だと、すぐ肺結核がどうかとか、肋膜炎がどうかとか、赤痢とかペストとかいろ／＼の病名、のみならず、其病證までも存して居られる方が多い様ですが、彼國では一向そんな事は知らない様です」

自然に起る病氣もありませうけれど、大抵は不注意不衛生などいふ不徳から起るのが多いのですからどうかお互に注意して餘り病氣の名など知らない位にしたいものです。



## 公德

東京市に、日比谷公園が開けましたに付いて、誰かこれは、東京市民の公德の試験所だと申した事もありましたが、事實、同公園は公德を守らない人に依つて、非常な迷惑だ相です。例へば齒のついた下駄、足駄等で踏んでならない所も構はずに踏みつけて齒跡を付けたたり、芝生を荒らして見たり、其他いろ／＼の不公徳をやつて顧みない人が多かつた相ですが、殊に聞き悪いのは、學校生徒などの団体觀覽で、やつぱり、公德を顧みない人たちがあつたといふ事です。

近來東京市の某小學校長が、公德養成の方便として、兒童に、市中に散見せる樂書さを消させる事を實行し始めた相ですが、二三年以來大に公德の聲が高まつたにも係りませず、近頃頓と低く、

なつた際、至極結構な思ひ付きだと存じます。

私共が、殊に學校生徒方に注意して頂きたいのは道路の左側通行は、お巡りさんの注意を受けないでずん／＼勵行して頂きたき事

四五人も横に、擴がつた儘で、何や乎やとお話しなどしながら、ぶら／＼お歩きになる事を已めて頂きたい事、これは人の邪魔になるのは勿論、体裁も餘り宜しからず、往來はなるべくサツサと歩く習慣にしたいものです。

因に、亞米利加邊りでは、往來で人にブツつかりますと、日本と反對にブツつかられた方の方が、御免なさいといつて謝する相です。つまり、ブツつかれる様な邪魔をしたのが悪かつたといふのです。開き戸の向ふに、人の居るを知らないで、此方からガタンと開けて、向ふの人を痛い目に遭

はす、お氣の毒さす、どうも、頓だ粗相でと此方  
からいふべきを、矢張向ふから、謝する。どうも  
邪魔な所に居て、あなたに氣の毒な思をさせたの  
は私の罪だといつてあやまるといふ風です。

勤儉

勤儉といふ事は、昨年あたりから、俄に聲が高ま  
つた様です、至極結構な事と存します。この事に  
付いて、私どもの考へて居ますことの一二は次の  
様です。

(い)家庭の支出中で、雜費の一項は、一番に狂ひ易  
いので、最も之に氣を付けること。

(ろ)一時の出來心で物を買はぬこと。出來心で買つ  
たものは、決して必要なものでありませぬ。或人  
勸工場に這入る毎に、目的の品物を買つて仕舞へ  
ば、もはや他のものには一切目をつけずに通り過

ぎたといふ事です。

(は)月の終に決算をした後に、支出表を一々調査す  
ること。費つただけ費つたのだから、何も見るに  
及ばぬといふ人もありますけれど、それならば別  
に帳面に記入する必要もないといふ事になるので  
す。ともかく、其月中の支出を見まして、或は餘  
計な支出をしては居ないか、不必要な費ひ方がな  
いかを見て、其次の月の參考にすることが必要で  
す。

編輯局より

▲日に増し、酷暑に向ひ候、筆硯益御雄健に渡  
らせられ候事と存じ候。諸姉諸君には、今日此頃  
何れも、山青く、波白く邊に悠々御清涼之御事と  
存じ、欣羨之至に堪へず候。紅塵萬丈、蒸すが如

さ東都の生活、あはれ御懺願上候。

▲本誌本號は、暑中休暇に際し記者何れも公私に多忙を極め候上に殊に編輯主任者に於て、さしはる事の候て、在外編輯に粗漏を極め候事、偏へに御海容を願ひ候。但し、其間に於て、聊か、本誌に光彩を添ふる事を得るに至りたるは

▲本號より、木版挿繪に力を入るゝ事を得るに至りたる事に候。當地青年畫家中の白眉たる某畫伯は、特に本號より其靈筆を揮はるゝ事を約せられたれば、爾後の本誌は之に依りて、大に其面目を一新するに至るべくと存じ候

▲尙次號には、響水氏の讀書餘錄に、シルレルの名文婦人氣質善惡兩面鏡の梗概出づべく、之によりて婦人の感情の如何許り極端に走せ易さかを了知せらるゝ事と存候。次に東基吉君は、多分幼

稚園案内と題して、精細に幼稚園の理論と實際とを紹介致さるべし事と存候。

▲更に又、本誌史傳欄に於て、下村教授と相并んで、縦横の史筆を揮はれし米溪子、雜錄欄に雄健の文字を弄せられしや、て君は、共に目下故山に歸臥中に付き本誌には執筆せらるゝを得ざりしもやがて、次號よりは、更に兩君の精彩縱溢せる文字に接すべくと存じ候

▲實は、毎々當地に於ける女學校、幼稚園其他の學校等を參觀致し、其記事掲載致したる者に候へども、何分公私の事務多端を極め、其意を果さず、其残念に存じ居り候。併し、何れは、必らず其都合仕るべくと存じ候

▲先は之にて欄筆仕るべく候。炎暑之候折角御自珍專一と存じ候。

早々